

# 消えない足あとを求めて

——台南醉仙閣の佐藤春夫——

## 1

九十年代のなかばから小説の「解釈」ということを大学で学び始めた。それまでは三島や川端、谷崎あたりが好きで、「夭折の美学」などという、今ではくすぐったくなるような甘い言葉に陶醉し、新潮文庫のオレンジと青と赤字の背表紙で本棚を埋めることに無上の喜びを感じていた。

文学部に行けば、好きな作家の「秘密」に触れることができるかも知れない。期待に胸ふくらませながら大学の講義を聞いてみたが、自分の思考とはどうも勝手が違う。すぐに分かったのは、文学研究の世界が、文学少年の趣味的な読書の世界とはかなり異なる所で動いていたということだ

## 河 野 龍 也

ある。そこではすでに、作家論と作品論の対立はむろん、作品論とテクスト論の対立ということさえも古びた話題となっていて、「作者を殺す」ことが「小説解釈」の常識になっていた。以来、小説と社会情勢との連関や表現技法の時代性など、「作者」を帰結点としない幅広い小説へのアプローチを知り、また私自身でも、個々の小説が持つ独自の構造を説明することに新たな喜びを見出すようになっていった。この方向性はもちろん今でも変わっていない。しかし、研究の世界に触れてから十五年間、ずっと棚上げ（生殺し？）にし続けてきた「作者」が、ここへきてにわかに気になり始めている。

佐藤春夫に関して言えば、臨川書店の三十八巻本全集が二〇〇一年に完結し、講談社版十二巻全集の欠が大幅に補

われた。これにより半世紀を超える作家の文業がほぼ網羅されることになり、今後の研究は新全集の恩恵なしには考えられなくなった。だが、それでも完結後に発見された逸文は多く、手稿まで射程に入れた膨大な生成研究と本文校訂は、将来の課題として依然残されたままである。また、

一八九二（明治二十五）年生れの春夫と直接交友があった関係者を探するのは難しいとしても、子や孫の代に受け継がれている貴重な文献や逸話を丹念に集め、年譜や註釈をさらに充実させていく作業は今でも不可能ではない。埋もれた資料や故人についての記憶は、いま意識的に集めなければ遠からず消えゆく運命にある。最近はこの「誰かがやらねば」という思いと、「今なら間に合う」という二つの思いが私をさかんに「作者」へと急ぎ立てている。そして、近代文学研究に古典研究とは異なる固有の醍醐味があるとするなら、その一つは確実に「作者」の痕跡を探す楽しさということが挙げられると思う。それは自筆原稿を検証するといったレベルから、作家馴染みの現役旅館や居酒屋を堪能するといったレベルまで、やはり「作者」との近さがこの分野に関わる楽しさであることは否定できない。

実際のところ、例えば漱石や芥川のように、基礎研究に分厚い蓄積のある方がまれで、むしろ多くの作家研究では、基礎研究を積み上げている最中か、ようやく緒についたと

いう段階でしかない。それほど近代文学研究は、対象となる時代にあまりにも近い普請中の分野なので、テクスト分析の技術を個人として磨くことの重要性は言うまでもないが、それと同時に、一見ナイーブであっても生身の「作者」を追いかける作業もゆるがせにはできない。それは次代への蓄積を残すといった意味合いもある。二者択一が美德だと思うから苦しくなるので、自分ではそういう無理をやめたいと近頃やっと思えるようになった。

## 2

二〇一一年二月下旬の一週間、台湾南部の都市台南に接する安平の町で、研究三昧の至福の時間を過ごした。ここは一九二〇（大正九）年夏、谷崎千代への恋にやつれた佐藤春夫が、心中の憂悶を抱えてさすらった古い港町である。台南は約十年ぶりの再訪、安平は初めてだったが、今回は安平出身の研究者・蔡維鋼さんの案内で、港の路地裏を二人乗りのスクーターで走り回った。今から九十一年前の古都の面影を探す時間旅行である。夜は蔡さんのご家族に真心のもてなしを受けながら、その日の成果を夜更けまで語り合った。蔡さんがウイスキーの盃を止めて考え込んでいる風情は、ちよつと酔仙閣の「世外民」を思わせないでも

ない。「世外民」とは、佐藤春夫の名作「女誠扇綺譚」に登場する若き漢詩人の名である。

社会派怪奇小説とも言うべき「女誠扇綺譚」（『女性』一九二五・五）は、この街を舞台にして生れた。物語は台南で新聞記者をしていた「私」が、「世外民」の手にした「台湾府古図」に導かれ、トロツコで安平街の赤嵌城址を訪ねる場面から始まっている。植民の島台湾の歴史を語る鄭成功の要塞はすでに跡かたもなく、かつて栄華を誇った安平港も土砂に埋まって見渡す限りの養魚池になっていた。水の枯野原とも見えるさびれた廃港の光景に、「荒廃の美」の具象化を見た「私」は、内地では体験できない深い感慨を催すのである。

「フム、これが港か！」

「さうだ！」世外民は私の声に応じた、「港だ。昔は、昔は台湾第一の港だ！」

「昔は……」私も思はず無意味に繰返した。それが多少感動的でいやだったと気がついた時、私は軽く虚無的に言ひ直した、

「昔は………か」

後年の春夫の回想によれば（女誠扇綺譚の建物や安平の風景は実景のつもり）（『かの一夏の記』『霧社』一九三六・七、昭森社）だという。しかし今、安平街の表通りは



(353) Bund of Anpin Formosa.

臺灣安平燈臺ト税關官舎

【図版1】大正初期の赤嵌城址

観光名所となり、赤嵌城も美しく整備されて、廢墟の面影はもはやない。養魚池は徐々に住宅地や工業地帯へと生まれ変わり、付近の景観は一変した。何とか当時の様子を偲ぼうとガイドブックを開いてみる。台湾総督府鉄道部発行『台湾鉄道旅行案内』の一九一六（大正五）年版と一九二三（大正十二）年版である。安平港の記述を繰ると、そこには次のような差異を見出すことができた。

〈此の地は清仏戦後四開港場の一にして対岸貿易の要津たり。大阪商船会社の台湾沿岸航路の寄港地として南部物資の吞吐港なり、然れども近時港内次第に埋まり、大船巨舶の碇泊に便ならず、故を以て其の繁榮は漸次打狗に奪はれつゝあり〉（一九一六年）

〈清仏戦争後は、基隆・淡水・高雄と共に本島の四大港として、外国貿易が盛となつたが、近來、港口の閉塞と共に、大船の碇泊に便ならず、其の繁榮は、全く高雄に奪はるるに至つた〉（一九三三年）（傍点河野・以下同）

ここには、時間をかけてゆっくりと減びつつあった一つの港に対する死亡認定のプロセスが刻まれている。春夫が訪れた一九二〇年前後こそ、安平の衰頹が決定的となり、台湾南部主要港の地位が名実ともに打狗（現・高雄）へと移った転換期に相当するわけである。

打狗は春夫の約三ヶ月半におよぶ台湾滞在のうち、最初の二ヶ月を過ごした街である。一九〇八（明治四十一）年以来、十五年計画でコンクリートの波止場と防波堤の造成が進められ、港の底をさらった残土は湿地の埋立てに使われた。その結果生れた広大な更地の上には、事業欲に燃えた移民が内地から続々と押し寄せ、対岸砂洲上の台湾集落・旗後街（現・旗津）とは全く異なる日本人商業区を出現させたのである。春夫を台湾へと慫慂した打狗の歯科医・東熙市（新宮中学同窓）もそうした移民の一人で、その片鱗は東の家を〈朝日を浴びたその新築の一戸〉（「かの一夏の記」）と記した春夫の文章からも窺われる。明るい根無し草の活気に沸く新興都市と、激動の歴史を鈍色に淀ませて沈みゆく港の廢市と。春夫は植民地インフラの整備によって興隆し、また凋落して行く対照的な二つの街の相貌を、その目で捉えてきたのである。

### 3

さて、春夫が台南を訪れた正確な日付や経路については実のところよく分かっていない。本人の回想では（註・東）の家を根拠に台南以南の見物に興じてゐるうちにこの地の暴風季になつて來たし、旅費も大分無駄づかひ



してしまつた。そんなにのんきに構へてゐる位なら一そ対岸地方も見物して来たらどうかと丙牛先生（註・森丑之助）の提案があつた」（かの一夏の記）というが、十五年以上経った後の記憶であるだけに、不正確な点も多い。

例えば、対岸見物（大陸福建省への渡航）は森の勧めによるものでなく、春夫から森に相談を持ちかけ、台湾新聞社の資金援助を得て実行したらしいことが、一九二〇年当時の春夫宛ての森書簡や父宛ての春夫書簡から分かっている。この一事によつても、春夫の記憶のみに頼ることは危うく、外部資料や同時代資料の裏付けが欠かせないことになる。

だが、およそ一世紀前の裏付け調査は簡単ではない。春夫と接触していた台中の『台湾新聞』を見たくても、大正期の同紙を所蔵する公共機関は台湾島内でさえ確認できないのである（どこか古い家の納屋にでも眠つていて、そのうちゴミ回収に出されるかと思うと気が気でない。断片的には、東京大学総合研究博物館の植物標本の包み紙として見つかつている）。唯一希望が持てるのは、台南第二高女の国語教師をつとめた新垣宏一が、昭和戦前期に「女誠扇綺譚」の舞台を实地調査していたことで、『台湾日報』（『台南新報』後継紙）紙上に断続的に掲載された記事が、今では得難い数々の事実を明かしてくれる。

新垣の調査は、「旧城の陳」の行方を追つて打狗から始

まる。春夫の「かの一夏の記」に、（且（註・東熙市）の知り合ひの本島人で自分の友人になつたのがまだ二三人はゐる。旧城の陳などは今でもよく覚えてゐる一人である）と見える人物である。旧城（現・高雄市左営区）とは高雄市北郊の半屏山と龜山に挟まれた蓮池潭にのぞむ古街で、（台南から汽車で一時間行程の龜山の麓の豪家の出）だという「世外民」のプロフィールに一致する。一九一三（大正二）年打狗生れの新垣はまず、記憶をたどつて東熙市の齒科医院が（浄水池の下、湊町方面を南に見渡す例の貴賓館道路の入口近く（現在の寿旅館のあるところ））にあつたことから説きおこし、（当時東氏方にみられその後を継がれた高野齒科医師）に取材して、東家出入りの台湾人のなかに旧城出身の陳姓の人物がいたことを確かめた（『台湾文学艸録（十七）佐藤春夫のこと』『台湾日報』一九三八・一一・一）。

高野齒科医師の談を聞くと、陳といふ旧城の金持が東氏の家へよく遊びに来たことはたしかで、何でも東氏はこの陳から金を借て家の設備をしたやうだと言はれた。とにかく、この陳は東氏、春夫等と同じ位の年配で、性質も面白かつたといはれる。よく三人で飲み廻つたりするくらゐ気があつたらしい。／「女誠扇綺譚」中に出て来る世外民は招仙閣樓上（註・醉仙閣）

で、此の「私」なる記者と痛飲するのであるが、私は春夫と陳の二人の向ひ会つた姿が頭に浮んで来るのである。(同(十九))一九三八・一一・五)

その後新垣は、この陳が〈前の岡山郡左衛門庄長(註・左営庄長)陳聰楷氏で現在は高雄で藥種商を營業してゐられる〉ことを突きとめ、ある日高雄塩埕町にその人物を訪ねている。新垣を迎えたのは〈瘦型の物やさしい五十近い紳士〉で、過ぎた夏の客人を〈佐藤スンプ(春夫)先生〉となつかしげに語る、面ざしゆかしい人物であつた。

新垣が紹介する陳の証言には、春夫の文章に現れない次の十の事実が含まれている(「女誠扇綺譚」と台南の町(三三)『台湾日報』一九四〇・五・一)。

- ① 春夫が福建土産の真白い中国服で散策したこと。
- ② 本島人の青楼で春夫が電扇を探したこと。
- ③ 「鷹爪花」の尼寺は鳳山竹仔脚の明禪堂であること。
- ④ 春夫の台南見物は二度目だったこと。
- ⑤ 安平や赤崁楼で、春夫が瓦を採集したこと。
- ⑥ 禿頭港には友人と三人で出かけたこと。
- ⑦ 春夫は帰宿後再び廢屋のスケッチに出かけたこと。
- ⑧ 三人で幽霊屋敷のある米街を散策したこと。
- ⑨ 宿は四春園であつたこと。
- ⑩ 中国服を着た春夫が、陳と並んで写真を撮つたこと。

むろん陳の記憶も二十年の月日を経てすべて正確という保証はない。だがこれが、今では台南旅行の空白を埋める唯一の貴重な証言なのである。

新垣は營業中の老舗旅館・四春園の帳簿に期待をかけるが、すでに記録は散逸し、春夫の台南訪問日を特定することはできなかったと言う。ただし、二度目の台南訪問が福建旅行の後であつたことは、陳の証言によって知ることができる。福建旅行への出発は、「よみうり抄」(『読売新聞』一九二〇・七・二八)の消息欄に〈佐藤春夫氏は二十一日厦門に渡つた〉とあり、春夫の『南方紀行』(一九二二・四、新潮社)には厦門・漳州をめぐる約二週間の記事がある。また春夫が東らに別れ、台北の森丑之助宅に到る縦断旅行に出たのが九月なかばであるから、春夫が陳と台南を訪れたのは、八月中旬から遅くとも九月初旬までの出来事だという推定までしか今のところはできない。「満韓ところ〴〵」(『朝日新聞』一九〇九・一〇・二二)一二・三〇)執筆のための詳細な日記が残る夏目漱石であれば、旅行中の一日を無作為に抽出して、その日の何時にどこで何をしていたかはかなり正確に特定できるが、春夫の場合、携帯していたはずの〈懷中記事冊〉(『南方紀行』)を旅行後の早い段階でなくしているため、時日に関わる謎は容易に解けてはくれないのである。こういう調査をしていると

きは、時折タイムマシーンがあればいいのにと本気で思うことがある。しかし、分らないということが、アリバイ捜索のような調査欲を掻き立ててくれることも確かである。

#### 4

「女誠扇綺譚」に話を戻すと、安平港を後にした「私」と「世外民」は、トロッコに揺られて四十分の道のりを台南西郊まで引き返し、そこで下車して禿頭港クッタウカンという古い街に紛れ込んでゐる。それは港から引きこんだ運河が最も街の奥にまで達した荷揚場で、往時はジャンク船が輻輳し殷賑をきわめたというが、いまでは悪臭の漂う陋巷に過ぎない。落胆する二人の前に、しかし突然、要塞のような銃楼を持つ古い豪邸が出現する。廢墟と見えるその家に足を踏み入れると、二階から「どうしたの？ なぜもつと早くいらつしやらない。……」と女の声がする。土地の老婆の話によれば、この家は対岸泉州からの入植者を先祖に持つ沈家のもので、一夜の嵐で破産した元の船問屋だと言う。初代の悪事が四代目に祟つての没落と噂されるが、沈家最後の一人娘は、婚約者を待ちながら二階の寝室で餓死したらしい。以来、そこに入る男は時々若い女の声を聞くので、幽霊屋敷と呼ばれて地元の間人は誰もが忌避する場所だと

言う。

二〇一一年二月二十日、蔡さんとこの廢屋があったと伝わる街の入口にスクーターを停めた（厳密に言うくと、蔡さんの運転するスクーターの荷台から私は降りた）。新垣宏一の現地調査によれば、土地も建物も細分化されて分かりにくいものの、広大な邸宅跡と思しき一帯が、台南西郊「仏頭港」の西側（海側）、かつて新港墘シンカンザンと称した入船町二ノ一六三を中心に残っていたと言う。新垣の紙面には銃楼を改装した家の写真も紹介されている（「女誠扇綺譚」と台南の町（四）『台湾日報』一九四〇・五・三）。今回の調査の最初の目的は、この家の現況を確かめることである。「入船町」という地名は、一九二〇年の地方行政制度改革のときに、伝統的地名の新港墘街を改称したもののだが、現在は信義街となり、旧台南市街の西端を扼する兌悅門から東に延びる細い路地沿いにあたっている。この附近は古くから「五条港」と呼ばれ、北から順に新港・仏頭港・北勢港・南河港・松子脚港の五本の運河が安平から枝分かれしてここに達していた。昭和に入ってからもしばらくの間、運河の周辺は養魚池になっていたようだが、今や全く潮の香のしない街中である。しかし、兌悅門近辺に残る「老古石街」の古称は、商品を満載して出帆した対岸貿易船が、帰路軽くなった船の転覆を防ぐために積み帰った石の集積

場だった名残りだという。清の道光十五年（一八三五）建造で、台南の城門としては唯一現役の兌悅門も、門口から基礎部分を見上げると石積みが見え、船の重しが建材に再利用されていた様子がよく分かる。このことは、「女誠扇綺譚」の次の描写にも符合するので、この地を作品の舞台とする新垣の推測の傍証として挙げることできよう。

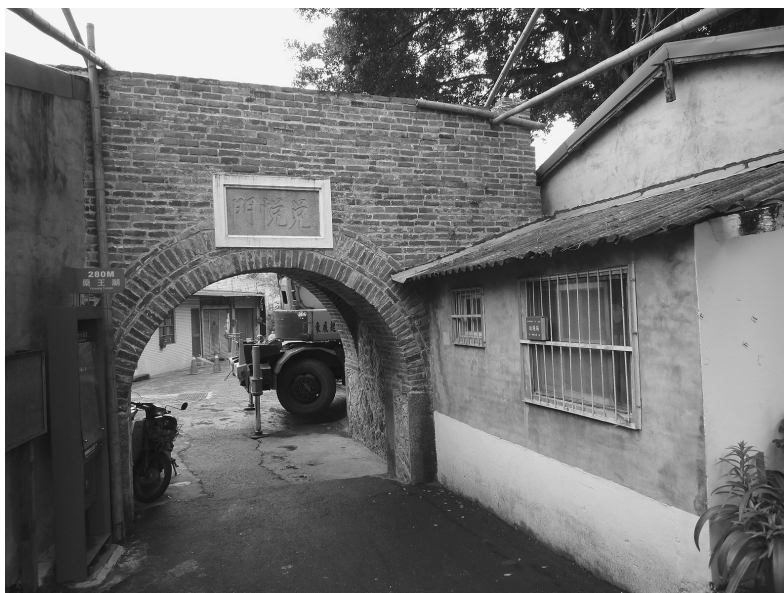
今出て来たこの路は、今までのせせつこましい貧民区よりはよほど町らしかった。現に私たちが背を倚せてゐる石垣も古くこそはなつてゐるけれども相当な家でなければ、このあたりでこれほどの石垣を外囲ひにしたのはあまり見かけない。さう思つてあたりを見渡すと、この一廓は非常にふんだんに石を用ゐてゐる。みな古色を帯びてそれ故目立たないけれども、このあたりが今まで歩いてきたすべての場所とその気持が全く違つて、汚いながらも妙に裕かに感ぜられるといふのも、どうやら石が沢山に用ゐてゐることがその理由らしい。

文賢路側（西）から兌悅門をくぐった私たちは、過去のへの扉を開けたような軽い興奮を覚えた。門入ってすぐ右側に「老古石集福宮石獅公館」があり、廟の工事に小さな人だかりがしているのを横目に見ながら、信義街の町名板が懸つた一帯をくまなく、それこそ両側の民家のひさしが

互いに接するような小路にいたるまで探しまわつた。しかし七十年前の新聞記事に載っている写真ですら、すでに銃楼としての特徴を失つた何の変哲もない二階家である。似たような建物はいくつも見つかりはするものの、それが清朝末期の建築かと考えると確信が持てないものばかりだつた。

二時間近い探索のなかで一度、ある種異様な思いを味わつたのは、切石の高い塀に囲まれた古い邸宅を街の中心に見出したときである。塀越しに見える母屋も石造で、厦門の鼓浪嶼に多く見られるような一九三〇年前後の様式の重厚な洋館である。「生生蘭藝」の表札がかかつた鉄門は堅く閉ざされており、一本の椰子の木が空高く抜きん出ていた。近頃まったく手入れされた形跡のない前庭の奥に、蔵造りのような石造の二階建てが見える。そこから夥しい鳥声がするので目を凝らすと、何百という数の黒々とした鳩の群れがひしめきあつて、巢を営んでいた。

日本時代の地番の変遷を知るために、中西区の戸政事務所を訪ねたが、はかばかしい答えは得られなかった。後ろ髪をひかれる思いで今は「五条港文化園区」と呼ばれるこの風致地区を離れたが、その後台湾文学館と台南市立図書館で文献調査をしているときに、思わぬ収穫を手にすることができた。



【図版2】現在の兌悅門

「女誠扇綺譚」では、幽霊屋敷を出たあと、馴染みの旗亭（居酒屋）で一献傾けながら、「私」と「世外民」は少し口論する。「私」の推理によれば、今日の女の声の正体は、時と場所からみて明瞭である。誰も近寄らない廃屋に、暑さで人出のない時刻を選んで女が一人待っているのなら、それは男と密会の約束をしていたのだ。しかし「世外民」は、〈理窟には合つてさうだよ。ただね、それが僕の神経を鎮めるには何の役にも立たない〉と言って、いくら説明しても納得しないのである。

「……世外民君！ 君は一たいあまり詩人過ぎる。古い伝統がしみ込んでゐるのは結構ではあるが、月の光では、ものごとはほんやりしか見えないうぜ。美しいか汚いかは知らないが、ともかく太陽の光の方がはつきり見えるからね」

「比喩など言はずに、はつきり言つてくれ給へ」一本気な世外民は少々憤つてゐるらしい。

「では言ふがね、亡びたものの荒廢のなかにむかしの霊が生き残つてゐるといふ美観は——これや支那の伝統的なものだが、僕に言はせると、……君、憤つちや

いかんよ——どうも亡国趣味だね。亡びたものがどうしていつまでもあるものか。無ければこそ亡びたいふのぢやないか」

「君！」世外民は大きな声を出した。「亡びたものと、荒廃とは違ふだらう。——亡びたものはなるほど無くなつたものかも知れない。しかし荒廃とは無くならうとしつつあるもののなかに、まだ生きた精神が残つてゐるといふことぢやないか」

「私」の紹介ではお互いの心を知り合つた無二の親友として語られる「世外民」だが、この場面には唯一、他者としての「世外民」の存在がとらえられている。失恋後の自暴自棄から新天地を求めて植民地をさすらい、〈台湾三界でこんなだらしない酒飲み〉となつた（ストレージヤ「無関心者」の「私」と、〈この港と興亡を共にした種族〉であり、異民族の支配下で先祖代々の「秀才」（科挙受験資格者として紳士の待遇を受ける）の榮譽を手でできなかった「世外民」とでは、同じ〈酒飲み〉にしてもその立場はあまりにも違ひすぎる。すでに論じたことなので詳述はしないが（拙稿「佐藤春夫「女誠扇綺譚」論」或る〈下婢〉の死まで——「日本近代文学」二〇〇六・一〇）、「女誠扇綺譚」は、台湾を新天地と夢み、「声の女」を道徳破壊の力強いヒロインと思ひこんだ「私」が、幻想を裏切られた腹いせに一人

の少女を追ひ詰め、死を決意させてしまうというある種の「犯罪」を、まことに隱微に語つた物語である。「世外民」との友情關係にしても、それを力説すればするほど、かえつて二人の亀裂の深刻さを浮かび上がらせるねじれ構造の独白体が、大きな読みどころになっている。

さて、二人がこの議論を繰り広げる旗亭の名は「醉仙閣」というのであつた。少なくとも活字発表された調査報告の中では、新垣宏一はこの旗亭のモデルに関して何も触れていない。「禿頭港」という地名についても、三〇年代の「仏頭港」における聞き取り調査で確認できなかったため、春夫の創作と考えていたようである。しかし、周菊香『府城今昔』（二〇〇三・一二、台南市政府）に収録された「光緒年間台湾府街道全図」を見ると、「仏頭港」の位置にはこの名がはつきり記されている。「女誠扇綺譚」に登場する固有名は案外虚構とは言い切れず、春夫の実地調査時の採録に基づくものではなからうか。

そこで戦前台南に存在した店舗の詳細を調べ始めた。日本国内でも簡単に閲覧できる地図資料編纂会編『中国商土地図集成』（一九九二・一〇、柏書房）所載「大日本職業別明細図」台湾・台南（一九三六・二、東京交通社）に、西門町四丁目交叉点の東南角地、現在の地名で言えば、市街西側を南北に走る西門路（かつての城壁を崩してできた

大通り」と、中正路との交点に、「酔仙閣」の名がある。だが、「女誠扇綺譚」を愛読して古都台南の風物に憧れを抱いた新垣宏一が、台南二女の教員となり、念願かなって市内の古跡調査を始めたのが翌一九三七（昭和十二年）だったことを考えると、この「酔仙閣」も、台湾での春夫人気にあやかっていた店名ではないかという疑念は、永い間ぬぐえずにいた。

信義街の調査のあと、旧台南州庁の建物を改装した台湾文学館を訪ね、『台南新報』の復刻版をめくり始めた時のことである。ここに収録されているのは一九二一（大正十）年五月以降の紙面なので、春夫在台時の記事そのものを読むことはできない。だが、わずかな手掛かりでもと、思っ大判の復刻版を流し読みしていると、一九二二（大正十一）年一月一日の紙面まで来てはっと息をのんだ。紙面の大半が年頭の挨拶で占められ、当時台南で営業していた店舗が軒並み名を連ねていたのである。しめたと思っ最初から一面一面注意深く辿ってみると、果して第三十二面最下段に小さく「酔仙閣」の活字が並んでいるのが目に入った。その広告にいわく、〈大歓迎忘年会新年宴会／台南市永楽町参丁目拾貳番地／支那料理店 酔仙閣／高得／設備改良、価格大勉強、嶄新御料理提供、貳百名以上の宴會は引受致候、特に御客様の御求めに応じ申候〉（図版3）。

念のため翌年一月一日の年始挨拶を見ると、今度は第十三面中段に、〈台南市永楽町三丁目（電話三七二番）／御宴席料理屋 酔仙閣／高金溪〉と簡略な記事が出ている（図版4）。設備改良という言葉からすれば、永楽町酔仙閣の営業開始は、一九二二年より少なくとも数年は遡ることができよう。わずか一年半前の春夫の台南訪問時に、この店が存在した可能性はかなり高いのである。また、先の職業別明細図に出ていた西門町四丁目の「酔仙閣」についても調べを進めて行くと、経営者の姓は高、電話番号は三七二番で、大正期の永楽町店舗が移転したものと見て相違ないことが分かった（図版5）。永楽町店舗は二百名以上の宴會が可能な大店舗だったようだが、規模の大きさは移転後の広告写真に見える五階建ての大建築からも頷くことができる。

「酔仙閣」が大正期に実在したことが、それが永楽町にあったことは今回の調査で初めて分かったことであるが、これは、春夫訪問時の足取りを考える上で極めて意義深い。日本時代の永楽町三丁目（旧・葉王廟街）は今の神農街、対岸貿易の守護神を祀った水仙宮の門前町で、現在まで続く永楽市場があり、古くから五条港の中でも最も繁華な土地柄であった。古地図で見ると、新垣が廃屋の所在地として特定した入船町二丁目はすぐ隣で、三百メートルも離れ

【図版3】『台南新報』一九二二・一・一

# 大歡迎忘年會新年宴會

支那料理店

臺南市永樂町參丁自拾貳番地

醉仙閣

設備改良、價格大低廉、最新料理提供、電氣以上  
の宴會は引受致候、特、御名義の御事も應じ申候

【図版4】『台南新報』一九二三・一・一

御宴席  
料理屋

臺南市永樂町三丁目

(電話三七二番)

醉仙閣

高金溪

【図版5】『台南市商工案内』(昭和期・刊記欠損)



西門町四丁目

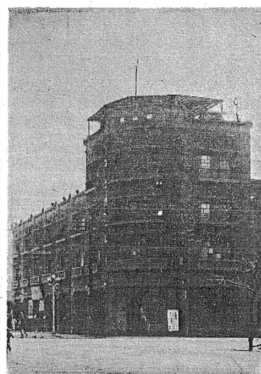
高大水

西料御中

醉仙閣

カフエー 醉仙

電話三七二番



※図版3～5は台南市立図書館蔵

ていない(図版6下段参照)。また、入船町の廢屋見学から市街中心の四春園へと戻るなら、水仙宮脇を通るルートが最も自然に選択される。春夫が「醉仙閣」に実際にあがり、陳聰楷と酒盃の応酬をしたことまでは不明だが、少なくとも藥王廟街を通ってこの中華料理店に目をとめなかったことは考えにくい。作中の「醉仙閣」という三文字の中には、春夫が台南をそぞろ歩きした九十一年前の夏の日の記憶が確かに封じ込められていたのである。

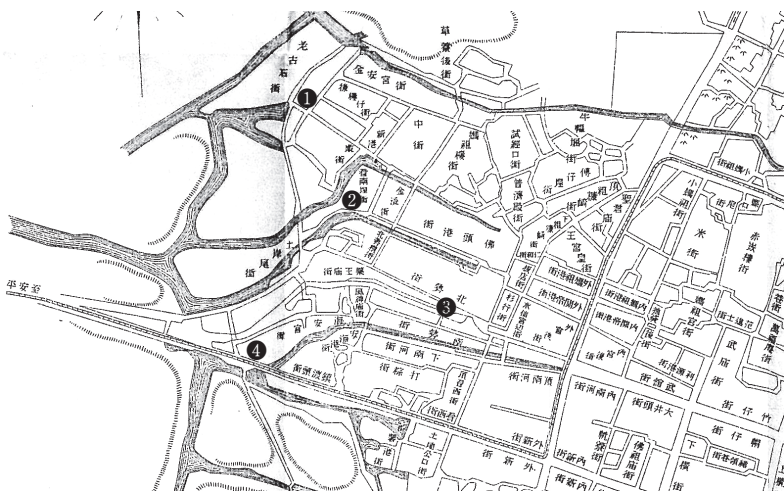
6

二月の調査では、このほかにも新しい事実をいくつか発掘することができたが、得てして容易に分かると思っていた事項はなかなか裏付けが取れず、到底望み薄と悲観していた事項の方が、幸運に助けられて発見できるような場合が多かった。こうした偶然的僥倖の中でも、今回最も記憶に残った調査の一こまを最後に紹介しておきたい。

本稿では新垣宏一の記事に見える春夫の案内へ「陳聰楷」なる人物に何度か触れてきた。今回の台湾訪問の大きな目的の一つには、彼にゆかりの人々を探しあてることが含まれていたのである。しかし、手がかりといっっては全く持ち合わせがなく、また台南滞在中も廢屋探索や文献調査



【図版6】『台湾鉄道旅行案内』一九一六（大正五年）版（上）と同二三（大正十二年）年版



- ① 兌悅門
- ② 廢屋の跡
- ③ 元の醉仙閣
- ④ トロッコの下車地点？

で予想以上に時間を費してしまい、こちらの調査にはなかなかとりかかることができなかった。一週間の滞在予定もほとんど時日が尽きかけた二月二十三日、ようやく昔の旧城、今は新幹線も停まる左営駅を降りて、蓮池潭に面した「旧城の陳」の故地に立つことができた。

新垣の記事によれば、「世外民」のモデル陳聰楷は元の左営庄長であった由で、まずはその方面に見当をつけることにした。しかし、いかに土地の名士であっても、個人情報管理が厳重な現在の台湾では、遺族探しは容易でないことが予想された。役所に来意を告げたところ、案内の職員の方が労を厭わず各部署に照会してくださった。カウンターで九十一年前の佐藤春夫の来訪や、新垣宏一の調査結果についてコピーを示しながら説明すると、とりあえずということで数名の職員の方が帳簿を調べてくださることに。その結果を待つ間、カウンターでのやりとりを聞きつけて集まってきた一人の職員が、陳聰楷の名を聞いて、かつての上司の父だと言う。幸いなことに、陳聰楷の子もまた左営の役所勤めであったのだ。その上司はすでに定年を迎えて他界したが、その子、つまり陳聰楷の孫は今でも左営に住んで店を営んでいる。訪ねる気なら今から電話をかけて面会希望の意を先方に伝えるという。

右にその一端が現れているように、役所の方々の応対は、

年度末の事務多端な折から申し訳ないほど親切なもので、「先方には確かに用件を伝えましたが、連絡はあったか」とあとで心配して電話をくださるほどだった。陳氏から連絡を待つ間は、古い城壁の中にある旧城文化協会を訪ねて、陳聰楷の旧宅は蓮池潭春秋閣に近い元帝廟の脇にあったこと、またその家の屋根には独特の棟飾りがあって仕官の家の格式を示していたこと、しかしその家は道路拡張の再開発ですでに破壊されたこと、そして陳聰楷が一九二六（大正十五年）年に城隍廟に奉納した木の扁額が今でも同廟三階の資料館で見られることなどの御教示をいただき、レンタルスクーターでその一つ一つを見て回るうちに日が暮れた。

陳錦清氏から連絡が入ったのは夜の九時すぎ、安平の蔡さん宅に戻り、二月というのに耳元をかすめる蚊をたたきながら文学談義をしている最中だった。待ち合わせは翌日の午後、実に帰国前日のことである。約束の孔子廟門前にスクーターで現れた陳氏は、新垣宏一が会った頃の陳聰楷と同年輩の小柄な方であった。目には柔和な光があり、気取らぬ自然体で人を惹きつける穏やかな印象も、新垣の描写を髣髴とさせる。錦清氏は陳聰楷の三男の次男にあたるという。台湾ビールを勧めながら、父の形見の古いアルバムを五六冊見せてくださった。そこで私は初めて陳聰楷の写真を目にするのであったのである。

アルバムを開いて説明してくださる錦清氏は、写真の中の祖父に見まがうほどよく面影を受け継いでいて、聴楷その人と対話しているような懐かしさを抑え難かった。そして、春夫と訪れた禿頭港の廃屋のこと、葉王廟街にあった酔仙閣のことなど戻らない夏の一日の行楽についてあれこれ質問をぶつきたい衝動に駆られている自分に苦笑した。

古都台南と「女誠扇綺譚」にむけられた新垣の一途な眼差しには、異文化の土地に生れた移民二世（いわゆる「湾生」）の切ない「郷土愛」がみなぎっている。その点簡単にその心事を推し量ることは許されなければ、こんな瞬間には、七十年という時の垣根が一気に取り払われてしまい、かつて同じ探索に情熱を注いだ新垣の思いがひしひしと身に迫ってくるようだった。

### 〔付記〕

今回の調査に多大なご協力をたまわった陳錦清氏、蔡維銅氏、高雄市左營区行政中心の皆さん、貴重な図版資料の掲載を快く許可してくださった台南市立図書館に謹んで感謝申し上げます。また、本文にお名前を挙げた方々のうち故人に関しては、歴史上の人物として敬称を省かせていただきました。御諒解をお願い申し上げます。

なお、今回の調査結果は、本稿で触れられなかった内容をも

【図版7】 林亮編『御大典記念高雄州人士録』（一九二九・七、台湾バック屏東支局）所載の陳聴楷像（陳錦清氏提供）。一八九二（明治二十五）年の生れで、春夫と同年である。



陳 聴 楷

岡山郡左營庄

陳 聴 楷 氏

氏年卅八。自從公學畢業。即投身商界。與故王兆麟氏。在鳳山共營製米、製餉、材木諸商行等。迄財界反動歸鄉。閉關自守。後適地方制度改正。以英明才。被擢爲該庄助役。補佐庄政。極其熱誠。未幾當局器其大才小用。陞任庄長。其時庄民多有欺其年少。至見其爲人和平。洞徹時世。公益義舉。靡不踴躍率先而進。是以庄政大有可觀。乃爲庄衆所敬服。今尙在職云



【図版8】陳聰楷一家。一九三四（昭和九）年一月撮影（陳錦清氏提供）。前列左より望祥（長男）、藍淑端（妻）、母、乃獲（父）、聰楷。後列左より掌珠（長女）、夢修（次男・錦清氏父）。

含めて、後日改めて詳細な註釈形式での公表を考えております。  
サンフランシスコの旅寓にて。二〇一一、八、九

（この たつや・実践女子大学専任講師）